

第三回「はなやすり出版文化を考える会」資料

日時：2024年8月25日（日）

場所：名古屋国際会議場 433 会議室

テーマ

文学者を知る 3「北原白秋」、4「中勘助」、5「壺井栄」、6「椋鳩十」、

7「巽聖歌」、8「永瀬清子」、9「新美南吉」、10「早船ちよ」

「熱田を知る 其の一」

資料作成 相地 透

## <文学者を知る 3 「北原白秋」>

### 1 基本情報

- ・ 詩人、童謡作家、歌人。
- ・ 1885（明治 18）年生、1942（昭和 17）年没。
- ・ 現在の南関町（熊本）で生まれ、柳川市（福岡）で育つ。

### 2 重要である理由

・ 自分の周囲を取り巻く自然をよく観て、親しみや恐れなどを感じながら、人の感情を重ね合わせて表現された最初の文学を万葉集とすると、現代の短歌は自然よりも人に大きく重点が偏っているようだ。それは、明治のはじめに登場した正岡子規に始まるアララギ派の影響が大きいと考える。「写実」「生活密着」は歌作のスタンスとして適切だと思うが、生活の周囲に自然を感じる事が無くなったとき、つまり、生活の周囲に自然観を育む土壌がなくなったとき、密着するもの、写しとられるものは「人」に偏る。子規は、過去の勅撰和歌集を評価しなかった。一方、北原白秋は万葉集と新古今和歌集（武士が登場した鎌倉時代、貴族文化の集大成である古今和歌集から万葉人の自然観、生活観に立ち返ることを目的とした勅撰和歌集）を評価した。明治維新以降、否応なしに西洋・東洋を強く意識せざるを得なくなった時代、日本人本来の表現をそこに見出したのだろう。

・ 白秋を先生と慕っていた巽聖歌、新美南吉をはじめ、椋鳩十も白秋の詩集「思ひで」を読んだ時のことをエッセイに書き残している。身近な自然を見つめて、童謡、詩、児童文学などの文学表現に昇華していった、後の文学者たちに与えた影響は大きい。

・ 自身の詩集や著書を、弟・北原鐵雄とともに立ち上げた出版社 ARS（アルス※前身は阿蘭陀書房）から発行している。ARS については、詳しい研究資料が無いが、本の発行点数や、言及している文学者が多いことなどから、当時影響力のある出版社だったと思われる。ファーブル、牧野富太郎、中西悟堂など自然にまつわる著者の本も多く刊行されている。戦後、経営を終えるまで、多岐にわたる出版物を発行していたようだ。巽聖歌は ARS で編集者をしており、そのことを生涯、誇りにしていた。

### 3 ゆかりの土地

- ・ 柳川市……出生地。生家が残されているほか、隣接して「北原白秋記念館」がある。
- ・ 三浦市……神奈川県の大磯半島とその先端部に位置する城ヶ島は、1910 年に初めて訪れ、

1913年から1年間住んでいた思い出深い土地。白秋が歌碑の建立を生前に許可したのは、城ヶ島と三浦市三崎にある見桃寺だけといわれている。城ヶ島には「白秋記念館」がある。

- ・小田原市……1918年から住んでいた。現在、「小田原文学館・白秋童謡館」がある

#### 4 参考文献や資料など

- ・歌集「雲母（きらら）集」（阿蘭陀書房）
- ・童謡集「トンボの眼玉」（ARS）

## <文学者を知る 4 「中勘助」>

### 1 基本情報

- ・小説家、詩人。
- ・1885（明治18）年生、1965（昭和40）年没。
- ・現在の千代田区神田で生まれる。4歳の時に小石川に一家で転居する。東京帝国大学を卒業後、各地を転々とする。居住地の変遷は次の通り。野尻湖（長野）→比叡山（滋賀）→我孫子（千葉）→赤坂（東京）→平塚（神奈川）→服織村（静岡）→中野（東京）。

### 2 重要である理由

・「孤高の作家」とも呼ばれる中勘助は、夏目漱石の弟子であるが、文壇の潮流とは一線を画していた。生涯にわたり、「病と死」が、作家の生活を取り巻く。実家のある東京・小石川に戻ることを厭い、各地を転々としながら、文筆活動を行う。寺など、自分の精神を脅かされない場所での逗留も多い。明治、大正、昭和と物的発展を進める社会が人の精神生活に及ぼす「無常」を感じ、自然に包まれて生活することで、本来の人の在り方を思索していたのではないだろうか。

### 3 ゆかりの土地

・平塚市……1924（大正13）年から1932（昭和7）年まで暮らしていた。「しづかな流」はこの頃の日記。

・静岡市……疎開のため1943（昭和18）年から4年間、服織村新聞（静岡市葵区）と服織村羽鳥で暮らす。そのときの日記は「樟ヶ谷」「羽鳥」にまとめられている。現在、滞在していた杓子庵と母屋が「中勘助文学記念館」として公開されている。

### 4 参考文献や資料など

- ・「顕彰誌 縁の作家、中勘助」（静岡市）

## <文学者を知る 5 「壺井栄」>

### 1 基本情報

- ・小説家、詩人。
- ・1899（明治32）年生、1967（昭和42）年没。
- ・現在の小豆島町（香川）出身。1925（大正14）年、同郷の壺井繁治を頼り、上京。結婚。世田谷に住み、生涯東京に暮らす。

### 2 重要である理由

・壺井栄は、花を愛した作家。「私の花物語」「続・私の花物語」「小さな花の物語」は、花をテーマとした短い物語を収録した作品集。初出の多くは雑誌に掲載されたものである。同時代の作家である吉屋信子が書き、女学生からの圧倒的な支持を得た雑誌連載「花物語」を読んで、「自分が思う『花』のイメージとは、ずいぶん違う。自分ならどのような花の物語を書くだらう」と考えて綴ったという。「花」をテーマとして表現する時に、草花や木の花を普段の生活のなかで、どのように捉えているかで表出される物語は大きく変わる。文学者の自然観を探る上で、とても重要。

・避暑に行く際は、必ず「牧野植物図鑑」を携えるほど、身近な植物を観察していた。

・「桃栗三年柿八年」という言葉がある。さらに「柚子の大馬鹿十八年」と続けた言葉を、サインを求められると書き記していたという。身近にある木の実の成長から生まれた、古くからあることわざ。人々に使われながら、さまざまなバリエーションが生まれているが、そういった言葉遊びを楽しみながら、自分の生活に取り入れていた人なのだと思う。

### 3 ゆかりの土地

・小豆島町……出身地。醤油樽の職人であった父の商売が傾き、子守をしながら小学校へ通う。卒業後、郵便局、役場に勤め、25歳で上京するまで暮らす。二十四の瞳映画村内に、「壺井栄文学館」がある。

・世田谷区……上京後、世田谷町三宿に暮らし、その後、同町太子堂に家を借りる。世田谷区には、世田谷に縁のある文学者の資料を収集している「世田谷文学館」がある。

#### 4 参考文献や資料など

- ・「壺井栄全集 6」(文泉堂出版)

## <文学者を知る 6 「椋鳩十」>

### 1 基本情報

- ・小説家、詩人。
- ・1905（明治 38）年生、1987（昭和 62）年没。
- ・喬木村（長野）に生まれる。法政大学在学中に学生結婚し、卒業後は鹿児島で暮らす。

### 2 重要である理由

・これまでは、「日本のシートン」のように動物文学者として語られることが多かったが、その作品群は多岐にわたる。フィールドワークを重んじ、猟師などへの綿密な取材をすることで、生きものをテーマとした作品を数多く残した。一方で、少年時代は南アルプスの自然に抱かれ、海外の文学作品と自分の住んでいる場所を重ね合わせて、感性を育んだ。学生時代は詩に憧れて学び、詩集を作っている。身近な自然への科学的アプローチと文学的アプローチが、もっとも素直に結実している文学者と考えられる。

### 3 ゆかりの土地

・喬木村……生まれてから東京の大学に入るまで暮らした村。小説家としての感性は少年時代の喬木村での暮らしにより育まれた。喬木村をはじめとする下伊那各地での取材に基づいて書いた作品を数多く残している。「椋鳩十記念館・記念図書館」がある。

・始良市……大学卒業後、鹿児島で医者をしていた姉をたより、移住。代用教員をしながら作家活動をする。戦後、鹿児島県立図書館長を 19 年間務め、その後、鹿児島女子短期大学の教授を 12 年務める。図書館長時代には、「母と子の 20 分間読書」運動を推進し、全国を回る。鹿児島の自然や民話に基づく話を多数書き残している。20 年間生活していた始良市加治木町に「椋鳩十文学記念館」がある。

### 4 参考文献や資料など

- ・「にせものの英雄」（ポプラ社）
- ・「自然の中で」（ポプラ社）

## <文学者を知る 7 「巽聖歌」>

### 1 基本情報

- ・ 詩人、童謡作家、編集者。
- ・ 1905（明治 38）年生、1973（昭和 48）年没。
- ・ 現在の紫波町（岩手）に生まれる。上京後、九州・久留米への引っ越しを経て、再上京し出版社 ARS に就職する。

### 2 重要である理由

・ 新美南吉の作品を世に出した人物。新美南吉は巽聖歌を兄と慕い、巽聖歌も妻とともに南吉を弟のようにかわいがっていた。自分の詩、童謡を書きながら、出版社 ARS では編集者の目で他者の作品にも触れる。自由な表現が戦争によって阻害されたことが大きな転機となり、自分がこれから何をすべきか見出した文学者たちは多いが、巽聖歌は、自分の表現を続けながらも、学校の先生たちに詩を書くことを教え、南吉の作品を世に出すことに尽力した。詩人、作家である以上に、編集者として生きることを望んだのかもしれない。

### 3 ゆかりの土地

・ 紫波町……巽聖歌の出生地は岩手である。代表的な詩「水口」は岩手の田園風景を描いており、紫波町運動公園には詩碑がある。1940 年に多磨短歌会の吟行で北原白秋とともに東北を回る。巽聖歌は恩師である白秋に自分の出生地を訪ねてほしいと懇願し、急遽日詰（現在の紫波町）を訪ねる。料亭で白秋夫妻と母を前に、涙ながらに謝辞を述べると、白秋も「巽、中尊寺よりも今日のことが有難かったよ」と応じた。

・ 日野市……1943 年から妻の野村千春と生活していた土地。「日野市郷土資料館」が巽聖歌に関する資料を発行している。

・ 中野区……童謡「たきび」のうた発祥の地。住宅街に竹垣に囲まれた邸宅が残る。新美南吉が東京外国語学校に通うため上京し、ともに暮らしていたのも中野区の上高田。

### 4 参考文献や資料など

- ・ 「たきびの詩人 巽聖歌」（日野市郷土資料館）
- ・ 「たきびの詩人 巽聖歌資料集 一」（日野市郷土資料館）

## <文学者を知る 8 「永瀬清子」>

### 1 基本情報

- ・ 詩人。
- ・ 1906（明治 39）年生、1995（平成 7）年没。
- ・ 現在の赤磐市（岡山）に生まれる。幼年期を金沢市で過ごし、名古屋市の高校を卒業。

### 2 重要である理由

・「雨ニモマケズ」が書かれた手帖が見つかった、宮沢賢治の追悼会に出席していた詩人として知られる。その場には、巽聖歌、新美南吉もいた。二人と交流があったかどうかは知られていない。

・ 巽聖歌の項でも触れたとおり、戦争を経験し、自分が戦後の世をどのように生きていくかを考えた文学者は多い。永瀬清子は東京で暮らしていたが、出生地の岡山に戻り、農業に従事しながら詩作を続ける。アジア諸国会議に出席し、中華人民共和国を視察し、生涯にわたり社会活動を続ける。土を耕し、野菜を育て、自分が暮らす土地の自然に包まれた生活を営みながら、世界の平和を実現しようと考えていた詩人だったのかもしれない。

### 3 ゆかりの土地

- ・ 赤磐市……出生地。熊山町のくまやまふれあいセンターに「永瀬清子展示室」がある。

### 4 参考文献や資料など

- ・ 「詩人永瀬清子作品集—熊山橋を渡る」（熊山町）
- ・ 「詩人永瀬清子の生涯」（赤磐市教育委員会熊山分室）
- ・ 「永瀬清子の光を受けて」（赤磐市教育委員会熊山分室）

## <文学者を知る 9 「新美南吉」>

### 1 基本情報

- ・小説家、童謡作家、詩人。
- ・1913（大正2）年生、1943（昭和18）年没。
- ・現在の半田市（愛知）に生まれる。

### 2 重要である理由

・新美南吉が身の回りの自然をどのように捉え、感じていたのかを知るためには、詩を読むともっとも素直に伝わってくると思う。詩をよく書いていたのは、亡くなる5年前からの安城高等女学校時代だが、自分がどのような環境に生きているのか、詩作を通してあらためて考えていたのだろう。

・最晩年に書き残した「小さい太郎のかなしみ」は、子どもと大人の違いをテーマとし、これはサン＝テグジュペリの「星の王子さま」にも通じる。発表年は、ほぼ同時期である。15年戦争とも呼ばれる長い戦争の時代に、病を抱えながらも文学者であることを望んだ日本の青年と、自分で飛行機を操り、旺盛な体力で冒険者として世界の空を飛び回ったフランスの壮年文学者の辿り着いた思索が重なり合うのは、人間が人間らしく生きるために考えるべき普遍的な問いは、洋の東西を選ばないことを示している。

### 3 ゆかりの土地

・半田市……南吉の心の中にはいつも知多半島の風景があった。「半田市新美南吉記念館」がある。

・安城市……1938年に安城高等女学校の教員として採用される。亡くなる1か月前に退職。この安城高女勤務時代に、詩を多数書き残している。

・中野区……東京外国語学校に通っていた頃の居住地は、すべて大学の近辺。

### 4 参考文献や資料など

- ・「ごんぎつねのふるさと 新美南吉の生涯」（大石源三／エフエー出版）
- ・「生誕百年 新美南吉」（新美南吉記念館）
- ・「東京における南吉の足跡調査について I」（遠山光嗣）

## <文学者を知る 10 「早船ちよ」>

### 1 基本情報

- ・小説家。
- ・1914（大正3）年生、2005（平成17）年没。
- ・現在の飛騨市（岐阜）に生まれ、高山市に育つ。高校卒業後、産婦人科の病院に看護婦見習いとして就職。その後転職し、東洋レーヨン石山工場（滋賀、東レの創業地）で働く。再度転職し、片倉製糸諏訪工場で働く。上京し、文学者、井野川潔と知り合う。戦時中は川口（埼玉）に疎開。井野川と結婚、浦和に移る。

### 2 重要である理由

- ・椋鳩十が編集した児童文学集に参加している。飛騨の山に暮らす人と動物の交流を描いた作品は、伊那谷を舞台にした椋鳩十と比較される。

- ・代表作である「キューボラのある街」は、雑誌「母と子」に連載された。女性が困難の中でも強く生きる物語を、自身の文学テーマとしており、児童文化運動も推進した。

### 3 ゆかりの土地

- ・高山市……故郷である飛騨高山を愛し、山をテーマにした物語を残している。高山の伝統的な暮らしを取材した随筆も書く。高山市図書館の2階に高山市近代文学館があり、作家の軌跡が紹介されている。

- ・飛騨市……生まれたのは現在の飛騨市古川町。飛騨市図書館には「早船ちよ館」がある。

### 4 参考文献や資料など

- ・「飛騨の四季」（朝日新聞社）

## <熱田を知る 其の一>

### 1 高座結御子神社（たかくらむすびみこじんじゃ）

高倉下命（たかくらじのみこと）は、天孫降臨の折に天磐船に乗って天下った。饒速日命（にぎはやひのみこと）の御子で豊かな穀物の貯蔵を司る神様ともいわれる。鎮座は本宮の熱田神宮とほぼ同時期で1900年の歴史を持つ。過去の造営には織田信長や蜂須賀家政等の地元大名の協力が残されている。現在の社殿は昭和38年5月に竣工した。例祭は6月1日で子どもを健やかに育ててくださる神様として信仰が厚く「子育ての神」と称され、多くの方々が子どもを伴って参拝する。この日御井社の井戸を覗かせると「虫封じ」になるという特殊な信仰が伝承され、俗に「高座の井戸のぞき」として有名である。

高蔵貝塚：明治の末年、この地から東の大津通の改修工事の折に、一大貝塚群が発見された。弥生土器や石器並びに大量の貝、複数の獣骨が確認でき、弥生時代から鎌倉時代までの遺構、遺物により往時の生活状況が立証された。尾張地方の代表的な弥生遺跡として有名である。

●自然の話＝アオバズク、ヒキガエル

### 2 登和山 青大悲寺（とわさん せいだいひじ）

宝暦6年（1756）この地で生まれたきの女が開いた如来教の本山。尼寺。その説法の速記録は「御経様」と呼ばれ、名古屋弁そのままに語られる特異な経典である。寺内の地蔵堂には、等身大の鉄地蔵菩薩立像（県指定文化財）が安置されている。像背面裾近くの銘文から室町時代の作であることが分かった。

●自然の話＝コヒロハハナヤスリ、イシガメ

### 3 断夫山古墳（だんぷさんこふん）

東海地方最大の前方後円墳で、全長151メートル、前方部の幅116メートル、後円部の直径80メートル、前方部の高さ16.2メートル、後円部の高さ13メートルを誇る。前方部と後円部の間のくびれ部に「造り出し」と呼ぶ小丘部が西側にある。後円部は三段築成であったと思われ、一段目に須恵質と土師質の円筒埴輪を巡らしていた。この古墳は6世紀初め、尾張南部に勢力をもった尾張氏の首長の墓と考えられている。昭和62年、国の史跡に指定された。

#### 4 秋葉山 円通寺（あきはさん えんつうじ）

今より 1800 年程前、日本武尊を火難よりお救いになった秋葉大権現は「火防守護、諸難消滅、心願成就」の大誓願をもって日本で始めてこの地に「秋葉神社」として尾張氏により祀られる（後の圓通寺）。始まりは尾張国の豪族であった尾張氏が熱田社に神宮寺として建立したものとされる。弘仁年間（810 年～824 年）に当地を訪れた空海がこの地に小宇を築いて、自ら彫った十一面観音像を安置したと伝える。後代、田島氏によって伽藍が建立され、誓海義本（大明禅師・普濟寺二世）を開山として松露山圓通寺として開かれたが、山号はその後に現在のものに改められた。宝暦 7 年（1757 年）に伽藍の大造営が行われたが、1891 年（明治 24 年）の濃尾地震で全て倒壊し、1907 年（明治 40 年）になって本堂が建て直されるなどしたものの、これらは 1945 年（昭和 20 年）の名古屋大空襲によって焼失、戦後に再建された。秋葉本殿も 1960 年（昭和 35 年）に再建されたものである。毎年 12 月 16 日に行われる火渡り神事（火まつり）は、境内に 4 間（約 7 メートル）四方の大護摩を焚き、火防守護・緒難消滅・福德延命などを祈願してその上を修験者や信者が裸足で渡るもので、毎年多くの人を訪れる。

#### 5 東海道宮宿（とうかいどう みやのしゅく）

宮宿は、東海道五十三次の 41 番目の宿場である。中山道垂井宿にいたる脇街道・美濃路（美濃街道）や佐屋街道との分岐点でもあった。一般には宮の宿と呼ばれることが多かったが、幕府や尾張藩の公文書では熱田宿と書かれている。場所は現在の愛知県名古屋市熱田区にあたる。東海道でも最大の宿場であり、1843 年（天保 14 年）には本陣 2 軒、脇本陣 1 軒、旅籠屋 248 軒を擁し、家数 2924 軒、人口 10342 人を数えたという。古くからの熱田神宮の門前町、港町でもあり、尾張藩により名古屋城下、岐阜と並び町奉行の管轄地とされた。

#### 6 鈴之御前社（れいのみまえしゃ）

熱田神宮の末社。天鈿女命（あめのうずめのみこと）を祀る。「鈴の宮（れいのみや）」とも呼ばれ、昔は精進川がこの宮のかたわらを行っていた。東海道を往来する旅人は、熱田の宮にお参りする前にここで身を清め、お祓いを受けてから本宮へ参拝する習わしだった。7 月 31 日の例祭には夏越しの祓いである「茅の輪くぐり」の神事があり、境内は大変賑わう。

精進川と新堀川：かつて今池辺りを源流として名古屋台地を行っていた精進川は多くの湧水による豊富な水量を持っていたが、曲がりくねった川筋が洪水の原因ともなっていた。この洪水の発生を防ぐとともに、船舶の航行と下水処理水の受け皿とするため、1883 年（明治 16 年）に運河として改修する計画が建てられ、1910 年（明治 43 年）に現在の川筋に付け替えられた。新堀川という名称はこの付け替えの際に付けられたものである。なお、元の精進川は 1926 年（大正 15 年）に埋め立てられ、消滅している。

## 7 裁断橋（さいだんばし）

宮の宿の東のはずれを流れる精進川の東海道筋に架かっている、現在の姥堂（うばどう）の東側にあった。天正 18 年（1590）に 18 歳になるわが子堀尾金助を小田原の陣で亡くし、その菩提を弔うために母親は橋の架け替えを行った。三三回忌にあたり、再び架け替えを志したがそれも果たさず亡くなり、養子が母の遺志を継いで元和 8 年（1622）に完成させた。この橋の擬宝珠に彫られている仮名書きの銘文は、母が子を思う名文として、この橋を通る旅人に多くの感銘を与えた。「てんしやう十八ねん二月十八日おだはらへの御ぢん、ほりをきん助と申す十八になりたる子をたゞせてより、又ふためとも見ざるかなしきのあまりに、いま此はしをかける事、はゞの身にはらくるいともなり、そくしんじやうぶつ給へ、いつがんせいしゆんと、後のよの又のちまで、此かきつけを見る人、念仏申給へや、卅三年のくやう也」。（※いつがんせいしゆん、逸岩世俊＝金助の法名）現在は裁断橋も縮小されたが、擬宝珠は市の指定文化財で市博物館に保存されている。

## 8 七里の渡し（しちりのわたし）

七里の渡しは東海道五十三次で知られる宮宿から桑名宿までの海路で、かつての官道。この渡しの宮宿側、または、桑名宿側の渡船場のみを指して「七里の渡し」と呼ぶことも多い。

熱田湊常夜灯：常夜灯は寛永 2 年（1625 年）、藩の家老である犬山城主成瀬正房（正虎）が、父正成の遺命を受けて、須賀浦太子堂（聖徳寺）の隣地に建立した。その後風害で破損したために、承応 3 年（1654 年）に現位置に移り、神戸町の宝勝院に管理がゆだねられた。寛政 3 年（1791）、付近の民家からの出火で焼失。同年、成瀬正典によって再建されたが、その後荒廃していたものを昭和 30 年に復元した。

熱田魚市場：東海道「宮の宿」に栄えた魚市場。天正年間（1573～）にはすでに魚問屋があり、織田信長の居城清州に日々魚介類を運んだといわれる。寛永年間（1624～）尾張藩政のもとに木之免（きのめ）、大瀬子に 4 戸ずつ問屋ができ、市場が開設された。以来藩の保護により、近海はもとより遠国からも魚介が運びこまれ、毎日取引が行われた。

●自然の話＝ヨシ帯、モズクガニ、渡り鳥、トンボ

## 9 白鳥山 法持寺（はくちょうざん ほうじじ）

天長年間（824～834）弘法大師・空海が熱田神宮にお籠りした折、日本武尊の白鳥御陵に小さな御堂を建て、自ら延命地藏を彫り、本尊としたのが始まりである。文明年中（1469～1487）に、熱田神宮大宮司の千秋氏が開基となって円通寺二世明谷義光大和尚を開山に迎え、曹洞宗（禅宗）として再興された。なお再興年次には他説もある。戦国時代には織田信長が桶狭間合戦に向かう途中、熱田神宮とともに白鳥山に立ち寄り、戦勝を祈願したと言い

伝えられている。古文書によると、当時は宝持寺と称し、日本武尊（御陵）の宝物を護持する寺という意味であった。その後、承応年中（1652～1655）に現在の寺号の法持寺と改称している。白鳥山法持寺は多くの名僧や学僧が輩出しており、末寺は23ヶ寺を数える。東海道を往還する文人墨客が足を留めており、芭蕉、林桐葉、若山牧水らが度々訪れて句会や歌会が開かれて、その石碑が残っている。平成24年10月には、35世大徹高風が『熱田白鳥山法持寺史』を著し、刊行している。

●自然の話＝スマレ

#### 10 白鳥古墳（しろとりこふん）

6世紀初めごろの築造と推定され、全長約74メートルの前方後円墳であるが、前方部と後方部の東部分が削り取られて、原形が損なわれている。古くからこの古墳は、日本武尊が白鳥となって熱田の宮に飛び去り、降り立った地であるところから白鳥御陵と名付けられたと言われる。